曾祢好忠の周辺

――小野宮家との交渉の意味するもの――

熊本守雄

はじめに

人間というものは、環境にとりまかれながら、自身の天性に応じて、さまざまな順応と抵抗とを試みているうちに、明確な個性を持った人間として形成されていくもののように思われる。一歌人・曾祢好忠についてみても、彼という主体を形成させた一要素として、彼をとりまいていた、諸々の環境を考えることができると思う。

好忠の、極めて特異だといわれる歌風も、個性的な好忠という創作主体ときりはなせない一体的なものと考えた時、彼の文学を理解するために、そうした創作主体形成の一端を担ったものとして、彼の属していた時代・環境を想定することがゆるされ、更にこの方面の検討を経て、好忠の和歌をみなおしてみる作業も必要になってくるものと思われる。

この小稿は、好忠の人間像を、又、彼の作品を、立体的とまではいかないにしても、せめて多面的にはとらえておきたいという、私の願望から出発しており、先に述べたような前提に立ち、作業意義を認め、かつ、そうした意図を内に含んだ作業の一環として、好忠と小野宮家との関係にスポット・ライトをあててみたく思う。

※　※　※

十世紀から十一世紀にかけて、実頼・実資を出した小野宮家は、有職家としては勿論、朝野の信望の厚かった権門勢家としても名をはせている。又、この小野宮家を中心とする一つの文学圏のあったことも認められている。（註1）

この小稿では、そうした小野宮家に、好忠が、相当な程度でもって、接近していったらしい形跡のみられる点に注目してみようと思う。こうした好忠の一面に、特に注目する私には、大きくいって、次のような二つの意図がある。

即ち、第一には、こうした一面をみていくことが、従来の好忠観ないしは彼の境遇に関する論述を検討することになると考えていること。と同時に、一人の作家を、一つの作品を、一面的にみないで、できうるかぎりの角度から検討してみることが欠かせないことであるとするならば、こうした好忠の一面をみのがすことはできないであろうし、その全体像・立体像把握のための礎石ともなり得る事柄だと思うからである。

第二としては、当時の摂関政治体制のもとにおいて、活躍している男性の歌人のほとんどが、僧侶と受領層歌人を中心とした官僚とであることを思い、又、当時の権門勢家によって催された歌合や祝賀の歌会について考える時、たとえば小野宮家という権門勢家を中心とした文学圏といったものが、当時の文学としての和歌に、歌合や歌会などといった場にあって、――あるいは、その文学的性格の形成にあたって、――更には、その表現の技法の上においても、何等かの影響を与えたに相違ないだろう、という想定を裏づけてくれる何ものかを、提供してくれることにもなると思うからである。

（一）

従来、好忠の性格・境遇・地位・評価等に関しては、多くの方々が発言しておられる。が、その大筋は、藤岡作太郎博士の『国文学全史・平安朝篇』中の、

好忠の伝は詳細を知ること能はず。素性高からず、みづから歌人を以て許せりといへども、縉紳の間に伍して、常に軽侮せらる。（中略）好忠性頑癖にして狷介、自ら高くして人を容れず、人もその微賤と不遜とを悪んで、かれを容れず、轗軻不遇にして一生を終りぬ。その歌また一世に歓迎せられず、空しく後の識者を待たざるを得ざりしは、作品の人物と同じく怪奇に流れ、時潮と悖戻せしを以てなり。

といった見解に立脚して、立論したものが多かったように思う。

すぐれた幾多の先人によって述べられた、好忠の境遇に関する論考の最大公約数的なものとして、池田亀鑑博士のものをあげてみよう。

彼（好忠）は生気のない無風状態の歌壇に、ひとり革新の調を歌った天才詩人であったにかかはらず、つひに世に容れられず、不遇な一生を憂愁と焦慮との中に送った。これはたしかに疑ふべからざることである。（「曾祢好忠についての疑問」・『文学』第二巻第八号）

かくの如き好忠を悲劇的革新歌人とみる見解は、折口信夫博士や池田弥三郎氏によって、一歩、屈折した形で推し進められた。折口信夫博士は、好忠に隠者文芸の先駆者としての生活態度を認められ（『後期王朝文学史』）、池田弥三郎氏は、好忠の歌から隠者の気分を感じとり、好忠に隠者的な面影を求めておられる。（『日本文学講座Ⅱ・曾祢好忠』）

好忠をこうした眼でみる研究者は、少なくないようである。又、こうした見解が出てくるのも尤至極と思われるような一面を、曾祢好忠集の歌は持っている。

たとえば、そのようなことは、好忠百首歌の序文からも感じとることができるように思う。この百首歌は、天徳の末頃に、三十余才の若さで詠んだものであるが（註2）、その中において、好忠は「あしたにはまどにさへづる鳥の声におどろき、ゆふべには籬に開くる花の色をながめつゝ、蓬のもとに閉ぢられて、出でて仕ふる事もなき」といった生活態度を示しており、世の無常を「ひを虫」や「草葉」にやどる露の「玉」に見い出したり、あるいは「春の夢」に託して、世の無常を受けとめようとする態度もみせている。更には、「昨日見し宝の宿も、今日は浅茅が原と露しげく、あしたに通ひし玉のとぼそも、ゆふべには八重葎にうづもれて」という如き、この世の転変の激しさ、無常の烈しさを表現している言葉もみられる。こ

うした詞句からは、多分に、世人との交渉もなく、ものしずかに生きた好忠の姿がうかんでこよう。

しかも「かりがねぞ鳴き帰るなる世中を憂しと見ながら今は厭はじ」（三百六十首歌・二月下）の歌などからは、無常を観想している好忠をみることができる、とまで言えそうである。

「あるかなきかの身をいかにせん」（正月下）とか、「露の我身ぞわびしかりける」（五月はじめ）といっている箇所だとか、「埋み火の下に憂き身をなげきつゝはかなく消えむ事をしぞ思ふ」（十二月はじめ）の歌などからは、先人の方々のいわんとされることもわかるような気がする。

曾祢好忠集のこうした箇所からは、人とあまり交際しない、どちらかというと、世渡りの術にそれほど長けているとは思われない、好忠の姿がうかんでくる。視点を換えていうと、世に容れられず、疎外されがちであった好忠の姿さえも想像される。よみ方によっては、好忠のそうした一面が強く浮びあがってくるのである。

しかし、ここで見過してならないことは、先程みたところの、世の無常さを強調しているところの発想が、百首歌や三百六十首歌を創るに至った心情と深いかかわりをもって出てきたものであるという点である。つまり、「ひを虫」とか「草葉の露」「水の泡」「春の夢」等の無常を表わす語句や、世の転変・無常の烈しさをいったところの諸々の表現も、「流れて盡きぬこと、水茎の跡にしるして」（百首歌の序）といった詞句とか、「露の命は絶えぬともゆくすゑ絶えぬ言の葉をかたみとも見よ」（三百六十首歌秋の長歌）といった言葉、あるいは、「耳に聞き目に見ることを写しをきてゆく末の世に人にいはせん」（冬の長歌の反歌）といった自分の詠んだ歌に対する強い自負と自信とに溢れた言辞と、対比させて受けとるべきだと考える。（註3）

即ち、自身の詠歌の永遠性を信じ、それを強調せんがために、対比して提示されたところの無常をいう言葉だと考えられる。栄華の亡びゆくはかなさに較べて、己の詠作した歌の亡びないということを強めて言うために、無常なものをもってきて対比したのだと解せる。

そして、好忠のこうした心情や言辞が生まれてくる根底には、自分の身の沈淪を嘆く心情があるように思われる。

「あはれ、たづきありせば、百敷の大宮仕へつとむとて、すべらの御垣面なれ」（百首歌の序）とあり、又「蓬のもとに閉ぢられて、出でて仕ふる事もなき」（百首歌・序）ともいっている。これらは、好忠の卑官沈淪の身を託つ哀嘆の声であるとみなしてよいであろう。又「のぼり船東風吹く風を過すとて世をうしまどになげきてぞふる」（三百六十首歌二月中）の歌や「花ざかりあまたの春を過しつゝ我身のならぬ嘆きをぞする」（三百六十首歌三月中）の歌、あるいは「ときにもあはぬ身にしあれば草葉をつめる事もなくうき身ひとつのつたなきを」（三百六十首歌夏の長歌）といった詞句、更には「年月を思ひのほかに過しやりかひなき身をば心のうちに嘆きつゝ」（三百六十首歌秋の長歌）といった言辞や、つらね歌中の「たづきありせばすべらぎの大宮人となりもしなまし」などといった言葉に注目すると、好忠には、出世仕官を望む社会的野心が極めて強く、その出世・栄達の望みの達せられないところから生まれた憂えもだえる心情があり、詠歌することがそうした憂悶のはけ口となり、更には、その詠歌の永遠性でもせめて信じることによって、己のやりどころのない心情

を紛らそうとしたのだ、とでもみるべきではなかろうか。

つまり、彼の歌からうかがえる無常観らしきものは、己の願望の叶えられないところから生じたところの負け惜しみにも似た、「この世における富貴栄達は、はかないものだ」とする、自己を強いて、慰めようとするところから生まれたものだとみなしたい。

もしくは、「好忠」という身分不相応にうるわしい名を持ちながら、人並な待遇を受け得ない我が身の不遇が訴嘆されている点、たとえば「名を好忠とつけしかどいづこぞわが身人に異るとぞや」（百首歌・序）といった言辞や、「親のつけてし名にし負はば名を好忠と人も見るがねとおもふ心のあるにぞあるらし」（三百六十首歌春の長歌）といった詞句、あるいは「うき身ひとつのつたなきを名を好忠と名づけつゝ」（三百六十首歌夏の長歌）といった箇所、更には、貞元二年の三条左大臣頼忠前栽歌合における「名をよしただとまうすをたのみて、たてまつるべしとは、はべるなるべし」の箇所など、身分不相応の名だとして「好忠」という名を連呼している箇所に注目して、そこには、無常を静かに観想しようとしながらも、なお執着を絶ち切ることのできない苦悩があると解し、こうした「好忠」という名を頻繁に使用していることを、自分の名をひいては我が身を世間に売り込もうとする意図の表われだとみなし、彼の行為は、とどのつまり、自身の栄進の端緒をつかもうとする、一種の自己売り込み策であるとみなすことはできないであろうか。

とまれ、無常をいい、身の沈淪を託つ根底に、出世・栄達を願う好忠の気持が強く存しているとみるべきではないかと考える。好忠集の中には、現在の境遇に満足しきれないでいる好忠の心情が吐露されている、とみることは許されることではなかろうかと思う。

こうした点に注目すれば、後世における隠者とはかなり質的に異なったものが、好忠にはあるように感じられる。

（二）

曾祢好忠集の歌のよみとり方の違いによって、作品の内部から浮かび上がってくる好忠像にも違いが生じてくる。又、資料の違いによっても、いろ〳〵異なった好忠の姿となって現出してくる。

それらの中には、ある面においては重なりあっても、他の面においては重ね合わせることの全くできそうにないような、異質なものも見あたる。

今昔物語集や大鏡からうかがえる説話的好忠像などは、典型的な一つの好忠像を造型している。しかし、こうしたものは、その作品のできた時代における好忠に対する解釈にすぎず、史実が伝説化され、戯曲化されていく作為のあとを見出だすことはできても、好忠その人が如何なる人間であったかについては、何ら教えてくれるところはないであろう。（註4）

しかし、従来、ともすると、今昔物語集・巻二十八にみられる子日の一件を、そのまま事実とみなした上で、好忠論を展開することがあったように思う。

従来みうけられた、今昔物語などの説話に立脚した好忠像とはかなり異なったそれを、島津忠夫氏が提示しておられる。（註5）

島津氏は、花山院を助けて拾遺集撰集に参加した人々として、従来からあげられている長能や道済の他に、曾祢好忠も関与したのではないかとあげて、好忠を花山院をとりまく歌人の一人と推測しておられる。

島津氏のこうした見解は、定家自筆本系統とは伝本系統を異にする、異本の拾遺集の考察から生まれたものである。即ち、佐賀県多久市立図書館蔵の拾遺和歌集や図書寮蔵十五冊本八代集中の堀河具世卿筆本拾遺和歌集などの考察から生まれた副産物とでもいったものであるが、私には、はなはだ興味ある見解である。

それというのも、藤原清輔の『袋草紙』にみえている有名な逸話――好忠の「なけやなけ蓬が杣のきりぐすす過ぎ行く秋はげにぞ悲しき」という歌に対して、長能が「狂惑ノヤツ也。蓬ガ杣ト云事ヤハアル」云々といったという逸話――を、長能が好忠を軽侮したものであるとか、あるいは、好忠の異端な人間を語っているものだとする、従来みられたような見解では理解せずに、別の角度からみなおして、長能・好忠両人が花山院をとりまく歌人であったらしいとする島津氏の推定の上にたって考え、長能と好忠とは、年令の上では二十余才も隔たってはいたものの、互いに気心のしれた、へらずロの一つも言い合える間柄だったから、先のような「狂惑ノヤツ也」などといった乱暴な言も出たのではないかと想像しているからである。

この想定は決して無理なことではないように思う。即ち、好忠の「蓬ガ杣」の歌を非難した長能が、好忠の「なけやなけ蓬が杣のきりぎりす過ぎ行く秋はげにぞ悲しき」の歌を模倣して構想を同じくする、次のような歌を詠んでいるのである。

題しらず

こゑたえずさへづれ野べの百千鳥のこりすくなきはるにやはあらぬ（後拾遺和歌集・春下）

花山にて四月一日のあけぼのに郭公鳴きけるを聞きて鳴けや鳴け山郭公春暮れて物さびしかるひとのきかくに（新続古今和歌集・夏歌）

同じ院（花山院）にて障子の絵に橘の咲きたる所

橘の花のさかりになりにけり山郭公きなけしばなけ（長能集）

ことに、「鳴けや鳴け山郭公」の歌は、花山院の許に人々が集まった時に詠んだものでもあり、こうした長能の詠歌を見ると、好忠が長能に軽侮されるような存在ではなかったことは確かだと思われる。

だが、この逸話を集録した清輔においては、現在この逸話を世間で解しているような受け取り方の線上をいくところの意識が既にあったであろうことは認めなくてはならないと思う。

袋草紙においては、この「蓬ガ杣」の歌にまつわる逸話につづけて、「曾丹、丹後ノ掾也。而シテ始メ曾丹後ノ掾ト号ス。其ノ後、曾丹後ト号ス。末ニ事フリテ、曾丹ト号ス也。此ノ時、好忠、之ヲ歎イテ云ク、いつ、そたといはれむとすらむと云々」と、「曾丹後ノ掾」という呼び名から「曾丹後」さらに「曾丹」へと略称されていったことに好忠が閉口した、という話を続けて掲載している。全く、別個の逸話であるはずの二つの逸話を、両者を一体となして語ることによって、好忠の新奇な用語を彼の特異な人柄によって説明し、好忠の異端な人間像を強調しようとする意図が清輔にはあったものと考えられる。（註6）このように、作者と作品とを重ね合わせることによって、好忠の奇矯な言動とか性質を連想させようとしていることから、清輔には今昔物語にみられるような好忠観の延長線上のものとでもいうべき認識が既に存在していたであろうことを感じとることはできる。

更になお、前述した、好忠を花山院とりまきの歌人と考えておられる、島津氏の見解に関連して想起されることは、花山院が当時の新形式であった連歌に異常な関心を示し、それを物名歌や謎問答の歌と共に、拾遺集に数多く採録しておる一方、曾祢好忠も天徳五（九六一）年頃と永観三（九八五）年二月とにつらね歌を作っており、又、天徳五年頃、好忠三十数才の時に詠作した百首歌の中において、「きのえ」「きのと」といった十干の名や、「ひんがし」「たつみ」といった八方位などを詠み込んだところの物名歌を作っておること、更に、同じその百首歌の中には「あさかやま」「なにはづ」の歌の文字の一字ずつを歌の首尾においたところの沓冠歌も詠んでいるし、天元四（九八一）年に行なわれた謎合に好忠は出席して、左の一番に歌を詠んでおり、その歌は拾遺集に収録されていることである。この点に、なにか符合するものを感じるのである。

（三）

好忠は歌人として、あるいは、彼が望んだほどの十分な厚遇を受けたとはいわれないかもしれないが、好忠は源順や恵慶法師とは面識があって百首歌の贈答をなしている。又、大中臣能宣や源重之・源兼澄とも相当に親しく交際していたようである。

『八雲御抄』の記事、「天徳、永承有二公卿作者一。寛和承暦無二公卿作者一。更歌人不レ入レ撰事多。謬聽二昇殿一不レ入レ歌例有二所見一。天徳好忠乍レ詠不レ入歟」（巻第二、作法部）によると、好忠は三十数歳の若さで、天徳四（九六〇）年三月三十日に行なわれた内裏歌合に昇殿を許されていたらしい様子であるし、三条左大臣頼忠は、貞元二（九七七）年八月十六日に行なった前栽歌合のあと、好忠を特別に召し出して歌を詠ませている。更に、それから四年後の、天元四（九八一）年四月廿六日に斉敏の遺子達が主催して行なった謎合にも、好忠は出席して最初に歌を詠んでいる事実があり、その翌年の天元五（九八二）年十二月二十五日に円融天皇が堀河院に再度の遷幸をなさった時にも、好忠は賀の歌を詠んでいる。或いは、寛和二（九八六）年六月十日に行なわれた内裏歌合では、実方・惟成・道長などと歌を合わせている。更に又、その道長が長保五（一〇〇三）年五月十五日に私邸京極殿で催した歌合にも、兼澄・長能・道済といった歌人達と共に招かれて、歌を詠んでいること等々をみてくると、好忠が歌人としての力量を在世中から相当に認められていたという事に関しては、疑問をはさむ余地はないように思う。

又、このような好忠の一面をみるならば、先にみた如き、藤岡作太郎博士の『国文学全史・平安朝篇』にうかがえるような見解とはかなり異なった好忠の一面を認めることができるように思う。

（四）

曾祢好忠集において、好忠は、人一倍仕官を願いながらも藤原氏一族には縁故もなく、栄達を図ろうにも何の「たづき」もないことを、悲しみ嘆いていた。又「よしただ」の名にも添わない身の不遇を悲しむ寂寥も詠んでいる。又、先程みたように、好忠集以外の資料によると、好忠は相当な程度をもって権門勢家に近づいてもいる。つまり、好忠は恵まれない現実の悲哀感と不安な生活感情とを歌に詠みあげながらも、一方では権門勢家に近づく努力もしたのではなかろうかと思われる。こうした好忠にみられる一面を好忠と小野宮家との関係に限定して、最後にここで見てみようと思う。

まず、好忠は、貞元二年八月十六日に行なわれた三条左大臣頼忠前栽歌合の後日、九月にはいって召され、序文ならびに「秋の夜の心」の和歌二首を献じている。

その序文において、好忠は「しきしまや大和の国の言葉にて、秋の夜といふ心を奉るべし」という命を給わったことを無上の光栄とし、又「千歳をかねて松虫の、声も惜しまぬ大殿に、さざれ石のなる巌を立てわたし、万づ代すめる水の辺に、千種の花は夜の錦とみえわたり」と言葉を極めて権門頼忠の富貴を祝福しておる。更には「あまたの虫は声も惜しまずすだく夜に、諸越や唐の言葉を千歳わかず知ろしめせり」と頼忠を誉め称えている。

他方では、「ゆかぬ心を雲の上まで通はし、数ならぬ身を天の中に尽しつつ」とか、「記せる言葉鳴滸なれど、知るも知らぬもみな人の、名を好忠と申すを頼みて奉るべしと侍るなるべし」というように、我が身を卑下してもいる。かような頼忠の意を迎えるような追従のことばを並べた序文が添えられているのである。

こうした傾向は、好忠に限らず、当時の受領層歌人一般についてみられることであり、当時の公卿社会の事実として、上流の権門に対する畏敬は絶対的なものであっただろうし、こうした歌会における種々の慣例を無条件に尊び戴こうとする意識も有していたことであろうから、先程のような好忠の弁辞が出たとしても、特に、取り上げることはないのかもしれないが、好忠が、文芸及び作家に関して理解のある頼忠に敬意をもって対している点に注目すると、彼のこうした弁辞は、そうした小野宮家に取り入ろうとした意図の一つのあらわれではないかと思われてくる。

更に、天元四（九八一）年四月廿六日に行なわれた故小野宮右衛門督斉敏君達謎合にも、好忠は参加して、しかも、左方の第一番に詠じている。

「小野宮故右衛門督の君達のわたりより出で来たりける、なぞ〳〵語合」とあるから、この謎合の主催者が斉敏の遺子達であることは明らかである。

斉敏は、関白太政大臣実頼の三男で、頼忠の同母弟である。天祿四（九七三）年二月十四日、従三位参議右衛門督兼伊予守の時に、四十六才で薨じている。

斉敏には、高遠・懐平・実資等の男子があり、その高遠や実資等の招きによって好忠は参加したのであろうか。あるいは、彼らの父・斉敏の時代から、好忠は小野宮家の庇護を受けて出入りしていたのかもしれない。

前述したように、頼忠前栽歌合にも後日、好忠は歌を召されて、序文ならびに和歌を献じていた。そのことも合わせ考えると、好忠が小野宮家の愛顧を受けていた歌人であった公算は強い。

好忠が、作歌的方面において、小野宮家と交渉を持ったということに関しては、清輔の『袋草紙』の記事も参考になろうかと思う。袋草紙の「歌仙モ晴時歌ヲ人ニ乞常事也。花山院歌合時、高遠卿令讀好忠」（巻三）という記事によると、花山院歌合の時に好忠は高遠の代作をしたようである。高遠は、実頼の孫、斉敏の長男で、後には大貳高遠と呼ばれ、中古三十六歌仙の一人にかぞえられてもいる。

花山天皇によって催された寛和二年六月十日の内裏歌合の時、高遠は三十八才で、最も充実した時期であったはずだが、袋草紙によると、高遠は好忠に歌を代作させたようである。

そうした事情を反映してであろうか、十巻本類聚歌合においても、二十巻本類聚歌合においても、「鳴く声もきこえぬものゝ悲しきはしのびに燃ゆる蛍なりけり」の作者を「よしたゞ」としながらも、脚に「或本高遠」と註を加えておる。この「蛍」を詠んだ歌は、詞花和歌集や後葉和歌集に収録されており、その作者を大貳高遠としている。おそらく、袋草紙に清輔が記しているような事実があったのであろう。

袋草紙の記事が事実だとすると、好忠は在世中、作歌の技量（殊に、臨機応変に歌が詠める技量）は相当に認められており、歌人としての地位も相当高く評価されていたであろうことが想像される。しかも、高遠が好忠に代作させたということを、偶然の結びつき方でないと考えるならば、好忠が作歌的方面において小野宮家と深いかかわりを持っていたこと、更には、好忠が小野宮家の庇護を受けて出入りしたところの――小野宮家の眷遇を受けた――歌人であったということも、全く想像できないことでもないように思う。

このようにみてくると、後に小野宮右大臣とよばれた実資の記録した『小右記』が、永観三年二月十三日に円融院が紫野において子日の遊びを催された際における好忠の行動に対して、多少の同情を含めた筆致をもって叙述していることも――実資の人柄にも多少は因るところがあるだろうが――好忠が小野宮家と何程かの交渉を持っていたからなのだ、とは考えられないであろうか。

『大鏡裏書』に収録されている「紫野子日事」の記事そのものは、権左中弁従四位下であった源扶義（註7）の日記から抄出したものであり、実資などと同様に、子の日の遊びに参会していて、この日の様子を目のあたりに見て書いた記事であるが、それによると、「丹後掾曾祢好忠永原滋節等不レ承二召旨一加候二末座一仍忽被二追起一于時両人低レ頭衆人解レ顔」とある。参列者が大笑したことは確かであろう。

そうした話が喧伝されているうちに、今昔物語にみられるような話まで成長していったものであろうが、実資の小右記によると、「公卿達稱無指召、追立善正・重節等、時通云、善正已在召人内ゝ」とみえている。右少弁であった時通の「好忠はお召を受ける筈になっていた」という意の説明を聞き得たことが大きく作用しているだろうが、実資は追い立てられた好忠に同情を寄せているのである。

小右記の記述からは、「公卿達稱無指召、追立善正・重節等」といった公卿達の言動を表に出すような表現をとることによって、公卿達の心ない行動を逆に非難するが如き口ぶりが感じられる。

おそらく、実資の儒教的な生活態度や倫理観に負うところも大きいのであろうが、好忠をかばう意識が働いたからではないかと思われる。好忠が小野宮家と面識があったからだ、とはならないであろうか。

おわりに

現存する少数の資料を、しかも、それを極めて主観的に受けとめて、強いて好忠と小野宮家とを結びつけて考えてみようと試みたが、そうした私には、好忠に関する資料が極めて少ないにもかかわらず――あるいは、少ないからかもしれないが――その多くが何らかの形で小野宮家と結びついてあらわれているかのように感じられ思われる。

又、好忠と小野宮家とを強いて結びつけて考えた私には、好忠集

中で訴えている好忠の心情の質からいって、彼が小野宮家などに近づいていったとしても、別に違和感を感じないばかりか、そうした一面を持った好忠であったからこそ、最初にみたような、好忠集中における好忠の言辞が出たのだと受け取り理解したい気持がある。

つまり、最初に掲げたような、藤岡作太郎博士などに代表される悲劇的英雄的革新歌人とする見解や、池田弥三郎氏などの好忠に隠者的歌人としての面影を求める見解とは、いささか異なったものを好忠の上に認めようと思う。

註1　例えば、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』に詳しい。

2　「好忠百首和歌」の序の冒頭に、「新玉の年のみそぢに余るまで……過ぎ行く月を数へつゝ、明けては暮るゝ久方の、月日をのみもすぐすかな」とあるところから、好忠が三十歳を越えた頃に、この百首和歌を詠作したことが知られる。しかも、恵慶集所収の恵慶法師の返しの百首和歌の序によって、それが「天徳のすゑのころほひ」（天徳五＜九六一＞年二月十六日に「応和」に改元）の事であったことも判明する。詳しくは、拙稿「曾丹集中のつらね歌に関する私見」（『中世文芸』二十四号）を参照されたい。なお、恵慶集については、拙稿「図書寮本恵慶集（501・401）について―定家自筆本の原型―」（『国文学攷』第三十二号）、及び「古本系統の恵慶集について――関西大学蔵（岩崎美隆文庫）本と書陵部蔵（図書寮150・558）本――」（『国語国文』昭和四十一年八月号）を参照していただきたい。

3　曾祢好忠集中の詠歌が持つ性格として、この点はしかと理解したい。少なくとも、家集中からうかがえる、時を得ず不遇だと自己認識する心情の吐露、及び、自己の詠歌を世の人々に知らせ、末の世の人の語り草にしようとする制作動機には、注目してしかるべきだと考える。

4　この点については、つとに、池田亀鑑博士が「曾祢好忠についての疑問」（『文学』第二巻第八号）に於いて、注意を喚起しておられる。

5　「拾遺抄から拾遺集へ――異本拾遺集をめぐって――」（『国語国文』第三十巻第二号）

6　この点については、藤岡忠美氏「曾祢好忠の文体についての序論」（『国語国文研究』第十八・十九合併号）が詳しい。

7　藏中スミ氏が「曾丹集のつらねうたについて（二）――大鏡裏書の筆者に関連して円融院子の日の事件の解釈―」（『水門』第二号）において、大鏡裏書の「紫野子日事」の条にひかれている権左中弁従四位下なる人の日記が源扶義のものであることを明らかにしておられる。